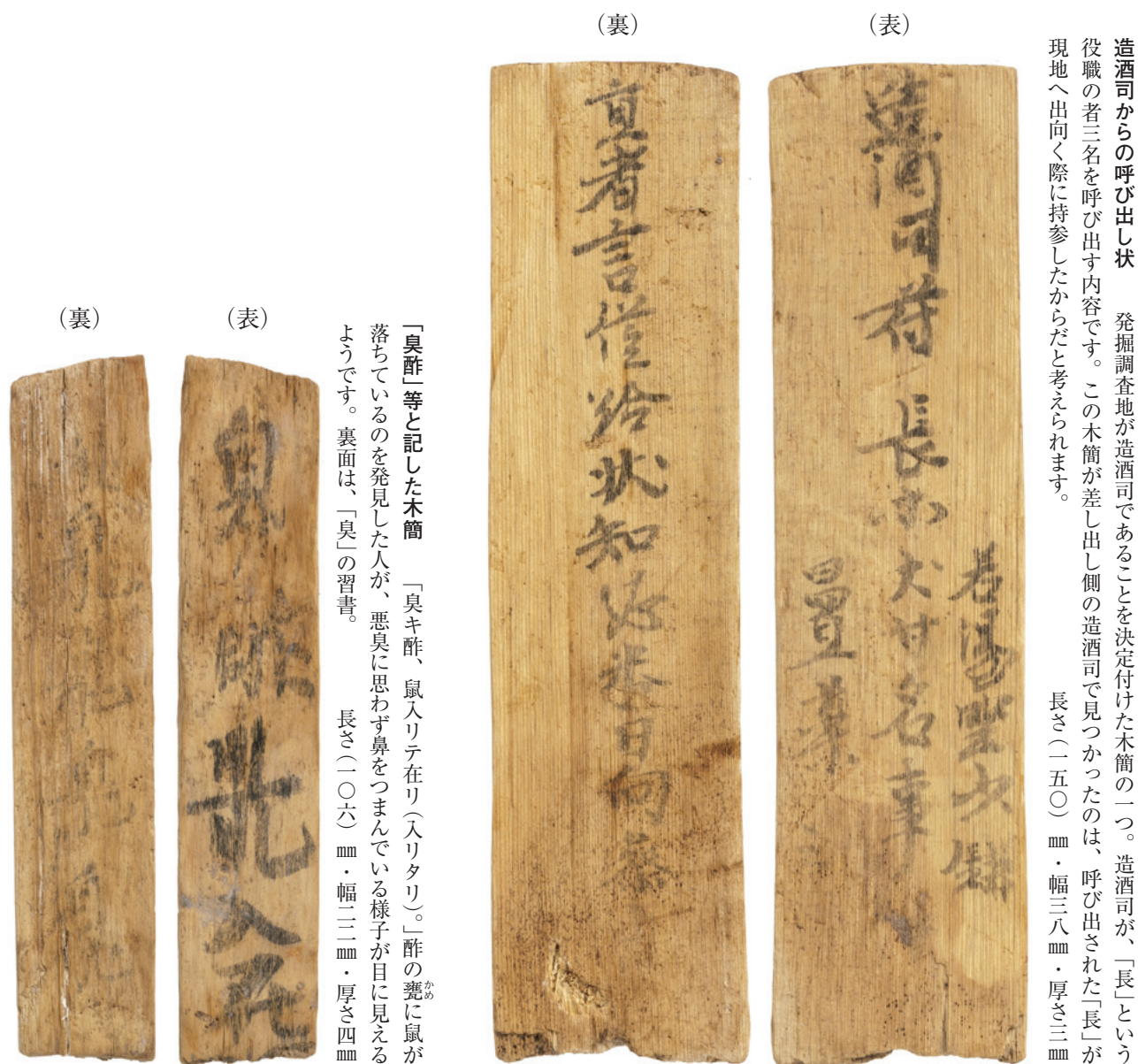


平城宮跡造酒司出土木簡(重要文化財)

前号(奈文研ニュースNo.58)でもお伝えしたとおり、およそ50年前に平城宮跡^{ぞうしゅうし}造酒司から出土した木簡568点が、本年9月に一括して国の重要文化財に指定されました。造酒司とは、平城宮の北東部に位置する、酒や酢をつくる役所です。木簡の重要文化財指定を記念して、10月17日から11月29日まで、平城宮跡資料館にて秋期特別展「地下の正倉院展 造酒司木簡の世界」を開催しました。特別展では、568点の中から選りすぐった75点のほか、酒器として使われたとみられる土器や、造酒司から出土したさまざまな瓦、木製の祭祀具など、現在までにおこなわれた5回にわたる造酒司の発掘調査成果も公開し、たくさんの皆様に足をお運びいただきました。

今回は、この特別展のメインとなった、重要文化財の木簡のいくつかをご紹介します。

(企画調整部 中村 玲／都城発掘調査部 桑田 訓也)



※写真は、すべて実寸大です。
欠損があるものは、長さ・幅に()を付けています。

水汲みの割り当て表 十二月十六日の水汲み担当者八名の氏名が書き上げられています。水は、醸造用として造酒司内の井戸から汲んだものと思われます。年紀は書かれていませんが、日付からみて、神亀元年(七二四)十一月におこなわれた、聖武天皇の大嘗祭(たいじょうさい)に関わるものである可能性があります。

長さ二五六mm・幅二六mm・厚さ四mm

(表)

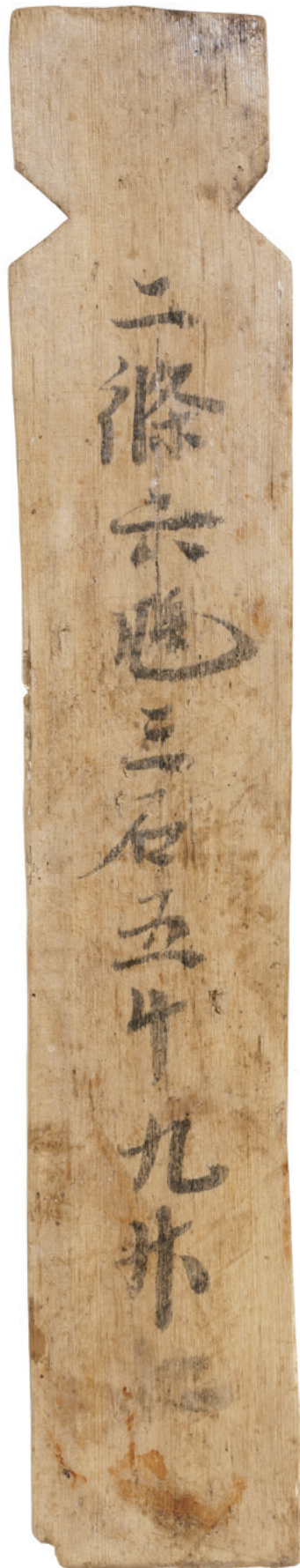


(裏)



大甕の付札 「二條六」は、二列目の六番目という意味。「甕」^{みか}は、酒の醸造や貯蔵に用いられた大型の甕を指します。造酒司の発掘調査では、内部に甕の据付け穴が整然と並び建物が多く見つかっており、この木簡の記載とよく合います。三石五斗九升は、今の一石六斗二升ほど、約二九〇ℓに相当します。

長さ二三五mm・幅四一mm・厚さ六mm



清酒の付札 清酒の容器に、整理用のラベルとして付けられた木簡。「中」は酒の等級を示すのでしょうか。清酒は「スミサケ」または「スメルサケ」と読み、「濁酒(ニゴレルサケ)」に対する語。上澄みをすくう、または布でろ過するなどして、酒糟と分離したものと思われま

長さ一五四mm・幅二二mm・厚さ四mm

